

行田市の観光と地域経済

▼古代から残る観光資源

今年秋に公開される映画「のぼうの城」で一躍、全国的に地名が知れ渡るはずの行田市。同市には古代から中世、近代、そして現代と様々な年代に沿って貴重な観光資源が点在している。各年代の代表的な観光資源を挙げれば、古代の資源としては古墳群や古代蓮、中世では忍城とその城を囲む沼や水路、そして辻。近代では足袋の街として知られ、現代はこれらの観光資源を活用した様々な祭りで、多くの観光客を呼び込んでいる。

その行田市は県の北部に位置し、人口約8万7,000人の豊かな自然と歴史のある中規模

都市。何よりも、9基の大型古墳からなる「埼玉古墳群」の名にあるように、埼玉県名発祥の地として知られている。国の指定史跡となっている埼玉古墳群は、5世紀から7世紀の初めにかけて造られたもので、9基の中で最もポピュラーな墳墓が「稲荷山古墳」や「丸墓山古墳」だろう。稲荷山古墳は、1968年(昭和43年)の発掘調査で「金錯銘鉄剣」や“帯金具”、“勾玉”などが出土。鉄剣には『先祖は代々、杖刀人首(親衛隊長)を務めてきた。わたくしはワカタケル大王(雄略天皇)に仕え、天下を治めるのを補佐した。辛亥の年(471年)7月に、このすばらしい刀にこれまでの輝かしい功績を刻んで記念とする』

行田市の主な観光資源

●忍城御三階櫓…市内の中心に位置する忍城。15世紀後半に築城され、豊臣秀吉の関東出兵の際には石田三成らの水攻めに耐えた「浮き城」として知られている。その当時の事が「のぼうの城」として映画化された。関東7名城の一つに数えられた忍城はその後、忍藩10万石の城下町として栄えている。現在の忍城御三階櫓は、明治に取り壊されたものを1988年(昭和63年)に再建したもので、櫓の高さは約24.6メートル。内部は郷土博物館の展示室で、最上階から市内を一望できる。

●郷土博物館…忍城三階櫓内にある郷土博物館には忍藩が繁栄した時代や足袋産業の様子を紹介する「常設展示室」、テーマに沿った特別展を行う「企画展示室」などがある。実物資料が多く、古代から現代までの行田の歴史と文化を知ることができる。

郷土博物館入口



●水城公園…忍城の外堀の沼を利用して、中国江南水郷式造園の手法を取り入れた県内でも最も古い都市計画公園の一つ。園内には田山花袋の小説「田舎教師」の文学碑や行田の歴史や文化にかかわる様々な記念碑がある。

●古代蓮の里…約1,400年から3,000年前の古代蓮のほか、剣舞蓮やインド蓮など42種類約12万株の蓮が植えられている。見ごろは6月下旬から8月上旬。蓮以外にも水生植物園や水鳥の池、梅林などがあり1年を通して四季折々の植物や野鳥を見ることができる。

●さきたま古墳公園…埼玉県名発祥の碑があるさきたま古墳公園には、国宝の「金錯銘鉄剣」が出土した稲荷山古墳や日本一の規模を誇る円墳の「丸墓山古墳」など9つの大型古墳がある。園内には県立さきたま史跡の博物館や、埴輪作りが体験できる「はにわの館」などがあり、多くの人が訪れている。現在、埼玉古墳群を世界遺産に登録するための運動が官民一体となって進められている。



さきたま古墳公園

●はにわの館…1時間半から2時間程度を目安に、埴輪づくりの体験ができる施設。造った埴輪は約1ヶ月後には完成する。



はにわの館

●大日塚古墳…6世紀前半に築かれた直径約18メートルの古墳。佐間古墳群唯一、丘が残る小円墳で埼玉古墳群を築いた権力者に従う小地域の権力者の墓と思われる。少なくとも2回にわたって3人の人物がこの古墳に葬られたとみられている。

といった内容が115の金象嵌^{きんぞうがん}で刻まれていた。

出土当時は、古代の歴史を解明する貴重な資料だ、として全国的に話題となったもので、遺物は一括して国宝に指定され、“さきたま古墳公園”内の「埼玉県立さきたま史跡の博物館」に展示されている。同博物館には鉄剣や勾玉などをはじめ、丸墓山古墳から発掘された埴輪もあり、古代史に興味を持っていないとも一見の価値は十分にある。公園内には「はにわの館」もあり、同館では埴輪づくりが体験できる。入館当日の午後2時半までに申し込むと、2時間ほどかけて粘土で埴輪を作り、その後に乾燥させ最後に館内の窯で焼くと、約1ヶ月後には完成する。

この、さきたま古墳公園を会場にして毎年5月に行われる「さきたま火祭り」は、行田市が誇る一大イベントの一つで、大勢の観光客が訪れる。毎回、市民の中から選ばれた男女が古代衣装に身を包んで輦台^{れんたい}に乗って入場、古代住居に火を放つと祭りは最高潮に達し、会場を埋め尽くした見物客の瞳を釘づけにして古代のロマンへと誘う。日中は郷土芸能や物産展、フリーマーケットが出展するので一日いっぱい楽しめる。

古代にまつわる観光資源として、もう一つ知名度の高いのが古代蓮。市がゴミ焼却場を建設した際に種子が出土、その種子が自然に発芽したもので、約1,400年から3,000年前の

- **旧小川忠次郎商店店舗と主屋（忠次郎蔵）**…足袋原料問屋小川忠次郎商店の店舗兼住宅として1929年（昭和4年）に建築された2階建て土蔵造りの店蔵。秩父鉄道行田市駅近くの蓮華寺通りに面して店舗が建ち、その後ろにL字型の住宅がつながっている。住宅は北側だけを土壁にした行田独特の“半蔵造り”。この店蔵は足袋蔵再活用のモデルとして整備され、現在はNPO法人忠次郎蔵によって手打ちそば店「忠次郎蔵」として再活用されている。国登録有形文化財。

- **足袋蔵まちづくりミュージアム（行田市観光ガイドステーション）**…間口5間、奥行3間の2階建ての土蔵。“旗印足袋”や“小町足袋”の商標で知られた栗原代八商店が1906年（明治39年）に日露戦争後の不景気で仕事をほしがっていた職人に作らせた、と伝えられる。NPO法人足袋蔵ネットワークが観光案内所兼まちづくり情報センターとして再活用している。

足袋蔵まちづくりミュージアム



- **武蔵野銀行行田支店店舗**…市の中心部に位置する鉄筋コンクリート造2階建ての本格的銀行建築。忍貯金銀行の店舗として1934年（昭和9年）に竣工したが、戦時中に行田足袋元売販売株式会社が建物を買収。戦後は足袋会館となり、1969年（昭和44年）から武蔵野銀行行田支店となっている。県内でも少ない戦前の銀行店舗で、足袋産業と深くかかわる行田を代表する近代化遺産。国登録有形文化財。



昭和初期に竣工した銀行の店舗

- **大澤家旧文庫蔵（大澤蔵）**…行田で唯一の鉄筋コンクリート組煉瓦造り2階建ての足袋蔵で、“花型足袋”の商標で知られる大澤商店が1926年（大正15年）に建築した。行田では珍しい袖蔵形式の蔵で、南隣りには1928年（昭和3年）竣工の木造2階建ての住宅、後ろには明治時代末期の頃に建設した土蔵がある。いずれも当時の足袋商店の栄華を伝える貴重な近代化遺産で、国登録有形文化財。

- **十万石ふくさや行田本店店舗**…十万石の本店として知られる黒漆喰塗りの重厚な店蔵。元は呉服山田清兵衛商店の店舗として1833年（明治16年）に建てられた。行田では珍しい江戸様式の店蔵で、1952年（昭和27年）には青柳合資会社の足袋蔵となり、1969年（昭和44年）から十万石の店舗となった。1978年（昭和53年）に改修が行われ、外壁にナマコ壁が設けられている。国登録有形文化財。

- **牧禎舎**…江戸時代から大正時代にかけて盛んだった行田の“藍染め”の伝統を気軽に楽しめる施設としてオープン。昭和初期の旧足袋・被服工場と事務所兼住宅を改装した工房で、ハンカチやバンダナ、Tシャツを染める体験ができる。

藍染めが楽しめる牧禎舎



- **旧荒井八郎商店事務所兼主屋・大広間棟・洋館**…1926年（昭和元年）から「穂國足袋」の商標で知られた荒井八郎商店が建築した行田市を代表する和洋折衷の建物。美しい庭園を持つ豪邸で、かつては政財界をはじめ多くの著名人が訪れ「足袋御殿」と呼ばれていた。現在は日本料理屋として再活用されている。



さきたま古墳公園で行われる
「さきたま火祭り」のクライマックス

蓮と言われている。通常の蓮よりも花卉数が少ない原始的な形態で、さきたま古墳公園の東に位置する「古代蓮の里」で見ることができる。約14ヘクタールの園内には古代蓮のほか中国古代蓮やインド蓮、韓国景福宮蓮など42種類、約12万株が植えられ、6月下旬から8月上旬になると見ごろを迎える。もちろん、蓮以外にも水生植物や水鳥の池、梅林などがあり1年を通して四季折々の植物や野鳥を見ることができる。

▼「のぼうの城」で全国PR

時代は古代から中世へ。この中世に残された観光資源は、何と言っても「浮き城」との別名がある「忍城」が代表的な観光資源で、忍城なくしては行田の観光は語れないほど。15世紀後半に、成田下総守顕泰が築城したと伝えられる城で、湿地帯を巧みに利用した守りやすく、攻めにくい関東有数の名城として名を馳せている。その忍城が関東だけでなく、“全国版”に名を広げる支援材料となるのが今秋、公開予定の映画「のぼうの城」。豊臣秀吉の小田原攻めに参陣した石田三成ら約2万を越す軍勢が忍城を取り囲んだが、籠城して守るのはわずか2,000人の兵だけ。三成は

利根川と荒川の水を引き入れて水攻めにしたが、とうとう小田原城が降伏開城するまで持ちこたえた、という史実を基にした物語だ。

後に、水が増しても落城しなかったのは『城が浮くからだ』と噂され、「浮き城」という別名まで生まれたほどの忍城で、江戸時代には忍藩10万石の居城として栄えている。明治維新で取り壊されたが、1988年（昭和63年）に天守閣がなかった忍城の中心的存在だった「御三階櫓」が再建され、その一部が行田市郷土博物館の展示室となった。行田市では「のぼうの城」の映画化に合わせて、忍城ゆかりの戦国武将に扮した「忍城おもてなし甲冑隊」を結成、週末や祝日などには忍城址に“出陣”させて、観光客を迎え入れている。博物館内の展示室には、行田の歴史と文化を統一テーマに貴重な資料が数多く展示されているが、定期的に講演会や講習会も開かれ調査研究の成果も発表されている。

▼足袋の街を巡る市中心部

行田市の中心部を観光するコースは、この再建された「御三階櫓」とともに整備された水城公園の「忍城址を振り出しにするのが定番」だと同市商工観光課。市内の地図を片手に展望台となっている御三階櫓の最上階に上



6月下旬から咲き始める古代蓮



1988年（昭和63年）に再建された忍城御三階櫓

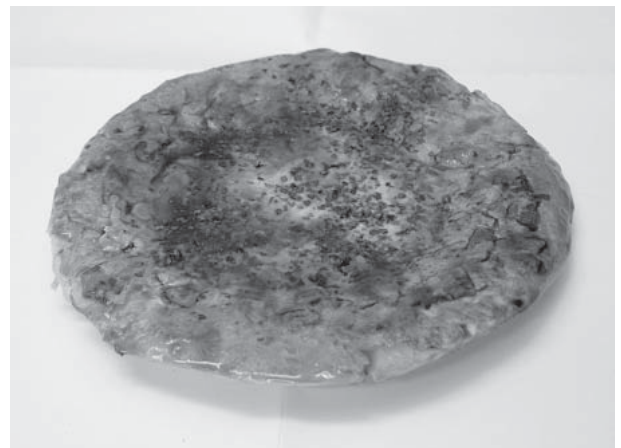
り市内を一望、目的の観光スポットを見定めて歩くのが良いという。例えば忍城址から東小路、浮き城の径を歩いて、公園通りを右に行くと水城公園に辿り着く。園内には、田山花袋の「田舎教師文学碑」をはじめとする記念碑があり、“しのぶ池”や“あおいの池”にはハクチョウやカモ、アヒルが泳ぎ、釣りも楽しめる市民の憩いの場が広がる。この公園の脇には日本料理を提供する店があり、中でも彩々亭は足袋工場を経営して一代を築いた荒井八郎が贅を尽くして建築した豪邸の「足袋御殿」を店舗にしている。大正ロマンの雰囲気漂う洋館と日本家屋からなる和洋折衷造りで、昭和天皇も訪れになったと言う。

荒井八郎が一代で財を成したほどの足袋製造は、近代産業の一つで行田はその一大生産地だった。もともと江戸時代中期から足袋作りが盛んだった歴史があり、明治20年代以降に足袋産業が発展すると、行田の足袋は日本一の生産地として知られるようになる。最盛期の1938年（昭和13年）には年間約8,500万足を生産、全国の約8割が行田の足袋で占められるほどに栄え、市の中心部には至る所に“足袋蔵”と呼ばれる个性的で趣のある商品倉庫が建てられた。その当時の面影を残すモダンで洋風な足袋工場や、一部を蔵造りに

した行田独特の“半蔵造り”の店蔵と住宅が近代化遺産として保存・再活用されて観光名所となっている。

▼食文化伝える行田のフライ

昭和初期に全盛期を迎えた足袋工場で、働く女工さんたちのおやつとして大ヒットしたのが“フライ”。今に伝える行田の食文化の一つで、食べずに帰ると行田を観光した意味が薄れる。行田のフライは衣をつけた、いわゆる揚げ物ではなく焼き物。小麦粉を水で溶きネギや肉、卵などの具を入れて焼いたもので、好みによってソースか醤油だれをつけて食べる。食感はクレープのようにふんわりとした舌触りのお好み焼きみたいなもので、市内のあちこちに30軒以上の“フライ屋”が営業している。もう一つ、“ゼリーフライ”という食べ物もあり、こちらはフライとは全く違う。お菓子のゼリーでもなく、衣のついていないコロケといった形で、ルーツは日露戦争の時に中国から伝わった“野菜まんじゅう”と言われている。ジャガイモをベースにネギやニンジン、おからが入っているので食物繊維が豊富な逸品だ。ヘルシーな食べ物だけに、美味しくダイエットできると、若い女性を中心に好まれている。ちなみに、ゼリー



女工さんたちのおやつとして大ヒットしたフライ

フライの語源は、小判型なので『銭フライ』と呼ばれていたのが『銭』がなまってゼリーフライと言うようになったとか。

観光につきものの“見る”、“食べる”に続く“買う”土産は、フライに代表される食文化を持っているだけに食べ物が中心だ。老舗企業の“十万石まんじゅう”をはじめ、“忍麺”や“稲荷山うどん”、“忍の炭焼きせんべい”など地元由来の名前を前面に押し出したものが多数ある。お土産に買って帰る観光客には地元名が出ていることから買いやすく、地域経済に大きく貢献しているのが特徴だ。

この食文化と忍城の存在を全国に宣伝するために、環境経済部内にある商工観光課とは別に、同市では「観光プロジェクト推進室」を設置。同推進室では、「忍城おもてなし甲冑隊」によるPR活動や「B-1グランプリ」、「全国藩校サミット」の誘致に取り組んでいる。すでに、B級グルメは2008年11月に第1回の大会が古代蓮の里を会場に開かれ、全国から16のグルメが参加して約2万3,000人が来客した。翌年の同じ月に第2回目が行われた時には、会場となった市役所周辺には21のグルメが立ち並び、来場者も約5万8,000人に増加している。そして昨年10月に実施された、さきたま古墳公園での第3回大会にはB



観光客を歓迎する「忍城おもてなし甲冑隊」



毎回、来場者が増加しているB級グルメ

- 1グランプリ1位のグルメも出店。過去最大数となる11県24食のグルメが大集合したことで、約8万人の来場者でにぎわった。同推進室では、過去3回の実績を生かして、今年はB-1グランプリの関東大会を誘致。さらには「ネームバリューがB級グルメとは格段に違うので、B-1グランプリの全国大会を誘致したい」と担当者は意気込んでいる。

一方、映画化と合わせて発足した「忍城おもてなし甲冑隊」は武将5人と足軽7人の合計12人のメンバーで構成。2チームに分かれて、1チームはデパートやショッピングセンター、あるいは高速道路のサービスエリアなどに出向いて行田市のPR活動などを展開している。活動は県内に止まらず全国に出向き、折からの歴史ブームに乗って行われている武者サミットや各地の武将隊と観光を通じた交流を深め合っている。もう1チームは、郷土博物館がある忍城址で来場者を歓迎。観光客からの記念撮影に応じたり、演武を披露しているほか、市内の隠れた名所・史跡やグルメの情報を紹介している。その効果で週末の入館者数が増加しているという。

▼歴史の街で体験する祭り

古代から中世、そして近代に残された観光

資源に加え、現代では「さきたま火祭り」だけでなく、多くの祭りが一年を通して繰り広げられ、観光客の誘致に一役買っている。主な祭りを紹介すると、4月の第1土曜日に開かれる「桜ボンボリまつり」は水城公園市民広場が会場で、満開の桜の下での大茶会が人気。古代蓮が開花した7月中旬には「蓮まつり」が古代蓮の里で行われ、同じ時期に「行田浮き城まつり」が行われ、そろいの浴衣やコスチュームで着飾った市民が“ソーレ、ソーレ”の掛け声とともに市内を踊り歩く。忍城の時代絵巻が見られるのが「行田商工祭・忍城時代まつり」で、11月中旬に忍城址周辺で見られる。このほか郷土芸能も盛んで、家内安全や五穀豊穡を祈願する「下中条のささら獅子舞」は、無形文化財に指定され治子神社と興徳寺で年に5回奉納される。

観光の見所豊富な行田市を一日で回るのは、なかなか骨が折れる。そこで利用したいのが市内循環バスで、北東・北西・東・西の4方面に分かれて運行、1回100円で乗車できる。それぞれ「かがやき号」「ふれあい号」「そよかぜ号」「浮き城号」の愛称で呼ばれ、どのコースも右回りと左回りそれぞれ1日5便が行田市バスターミナルを出発して戻って来る。循環バスを利用すれば、市中心部から少し離



“ソーレ”の掛け声を響かせながら市内を歩く「行田浮き城まつり」

れている埼玉古墳公園や古代蓮の里にも、その日のうちに足を延ばせる。

▼目差す姿は終日観光地型

行田市が観光地として目指している姿は、小江戸・川越のような半日観光ではなく、豊富な観光資源をベースにした終日観光だ。その姿を実現すべく同市では、点だけで終わっている観光資源を点と点で結び付ける努力を続けている。商工観光課では「去年はテレビなどで取り上げられるようになり、のぼうの城を目当てにした観光客が急に増えた。観光関連予算の規模も大きくなり、これからは既存の観光資源に加えて新たな資源発掘にも取り組んでいく」と話す。ただ、終日観光型を目指すには「リピーターを増やすことが重要」（商工観光課）と話すように、1回だけの観光で終わらせることなく、何回も行田に来てもらう工夫が必要。「そのためには、おもてなし甲冑隊が実践しているように、来てもらって満足してもらう“おもてなし”の心を市民も含めて、全市的に共有し実行していかなければならない。映画の公開やB級グルメを起爆剤に、おもてなしの心の温度を高めていきたい」と話している。



戦国絵巻を見るような「行田商工祭・忍城時代まつり」